

いいおか復興観光市民カフェの記録

平成 25 年 4 月

いいおか復興観光市民カフェ実行委員会
特定非営利活動法人ミレニアムシティ

1 市民カフェの経緯

この「いいおか復興観光市民カフェ」は、平成 24 年 5 月～平成 25 年 3 月までに行われた「いいおか復興観光まちづくりコンペ」に合せて企画されたものである。「いいおか復興観光まちづくりコンペ」は、いいおか津波復興プロジェクトが主宰して全国に向けて飯岡の復興のアイデアや計画案を募集したものである。しかし、民間団体の主催であり、その結果が復興まちづくりにどう活かされるかについては未知数である。一方、このコンペでは市民審査が予定されており、市民の参加を促していることが特徴となっていた。

市民審査を行うには、応募作品を読み解く力があることに合せて、自分なりの復興のビジョンを持っていることが必要であると考えられる。そうでないと、ビジュアルのきれいな作品や現実から乖離した作品が選定されてしまう恐れが懸念された。そこで、市民が各自の復興まちづくりのビジョンを思い描くことができるように、市民向けのワークショップを行ったらどうかという発想で提案されたのが「いいおか復興観光市民カフェ」（以下市民カフェと言う）である。同時にそれは、復興まちづくりを担う人材を発掘し、育てる場としても期待された。

このような経緯で市民カフェが始められた。当初は、多くの市民を集め、ある程度固定されたメンバーを中心にワークショップを行い、復興まちづくりのビジョンを一緒につくるという目論見であった。しかし、人集めや広報を組織的に行う体制をつくることができず、会場である飯岡保健センターの利用者を中心に行うことになった。そのため、毎回、いろいろな意見や感想を聞いて、それを取りまとめるというワークショップを行うことになった。当初の目論見と違った形になったことは残念であったが、被災者や近隣の方、また、旭市全域の方々など、のべ 200 人以上の市民の生の声を聞くことができたことは大きな成果であった。

一方、復興まちづくりでは、被災者の意向を聞くことが非常に重要である。そこで、第 1 回から事前に仮設住宅をまわって案内チラシを各戸配布した。しかしながら、市民カフェに仮設住宅の住民の方はあまりたくさんおいでいただくことができなかった。特に、飯岡仮設住宅は飯岡保健センターに隣接していながらおいでいただいた方は少なかったのは、被災者の心情によるところが大きいと思われる。こういったところにも精神的な壁があり、私達もその壁を作ってしまったことを反省しなければならない。仮設住宅のチラシ配りでは、在宅の方には直接手渡し、生活の様子や今後の計画などを伺いながら行ったが、第 5 回、第 6 回市民カフェの当日の午前中からは、案内チラシを配布しながら、在宅の方への個別ヒアリングを実施した。



2 まとめと今後の展望

この市民カフェでは、のべ200人以上の参加者から多彩な意見を収集することができた。その中には復興の手がかりとなる貴重な意見もたくさん寄せられた。しかし、最も復興を必要としている被災者の声については、十分に把握できたとは言いがたい。それは、市民カフェのきっかけとなった「いいおか復興観光まちづくりコンペ」でも同じであって、被災者の生の声や希望が入らない提案募集となったのではないかと危惧がある。今、被災地で必要とされているのは、様々な提案を具体化することである。

市民カフェは、6回を数えて一段落としたい。これからは、市民カフェで得られた成果をもとに、より具体的な復興に向けての活動にシフトしていく必要がある。被災者の声を反映させる計画にするためには、被災者に寄り添ったヒアリングや計画の提案が求められる。そして、市民の望む復興の姿が目に見えてくるようにすることが何より求められている。

3 市民カフェの実績

市民カフェは次の日程で行われた。毎回30～40名、のべ212名のもの参加者と、仮設住宅ヒアリングでは25名の方からお話を伺うことができた。

	日時	テーマ	参加者数
第1回	平成24年9月2日 13時30分～16時30分	我が家の暮らし	35名
第2回	平成24年9月2日 13時30分～16時30分	大切にしたい事・物	28名
第3回	平成24年10月28日 10時～13時30分	まちづくりの芽	43名
第4回	平成24年12月8日 13時30分～16時30分	復興で大切にしたいこと	39名
第5回	平成25年1月25日 13時30分～16時30分	生活を再建する	仮設住宅ヒアリング11名 32名
第6回	平成25年3月9日 13時30分～16時30分	生活を再建する	仮設住宅ヒアリング14名 35名

ワークショップはワールドカフェ方式で行われた。各回の市民カフェごとに一応テーマを設定したが、テーブルごとに出された意見をもとにその都度テーマが設定された。



※ワークショップ：共同作業という意味。参加者がより積極的に参加する手法としてさまざまな分野で行われている。

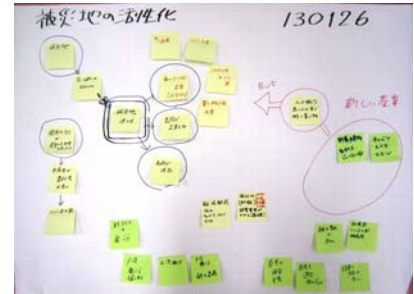
※ワールドカフェ：ワークショップの一つの方法。喫茶店で自由に意見を言うといいアイデアが出ることから、カフェのような雰囲気で行われる話し合いを進める方法。

4 市民カフェで出された主な意見

市民カフェで出された意見は多岐にわたっている。しかし、被災地の復興というテーマが通底しているため、類似した意見も多数出されている。市民カフェで出された主な意見を、6つの切り口にしてまとめると次のように整理される。

①被災地の活性化

- コミュニティの崩壊……震災は地域のコミュニティを破壊した。津波被災地では家を再建することができず仮設住宅で暮らしている家庭、地区外に移転せざるを得ない家庭が多数ある反面、家を建て替えや補修することによって住み続けている家庭もある。それぞれの家庭の事情によって選択はまちまちであるが、営々と築かれてきたコミュニティは崩壊してしまい、連絡も取れない人が多いという。
- 被災地の空白……被災地では、何割かの家庭が住み続けている。しかし、もとのにぎわいには程遠い状態である。しかも、更地になっている敷地はマダラ状の空白地帯となっている。
- 自力再建の困難……更地になっている敷地の所有者に話を聞くと、経済的に建て替えができない、あるいは津波が怖いので戻りたくないという声が多くである。したがって、更地の状態は将来も固定されてしまう恐れがある。まちの復興を望んでも、きわめて困難な状況がある。
- 被災地の活用……現在、住み続けている方は被災地に人が戻ってくることを望んでいる。一方、更地になっている敷地の所有者の中には、土地を売却または借地にしてもよいという方も多くいる。被災地を活用できる方策があれば、土地を利用してもらいたいという声もある。住み続けている人にとっても、被災地が活用され、人や賑わいが戻ってくることを望まれている。



②高齢者の買い物環境

- 身近な買い物場所……車に依存した社会では、遠くても大規模で価格も安い店ができるとそこに買い物に行く人が多くなる。そのために近所にあった店舗はどんどんつぶれてしまい、ますます遠くの店舗に依存せざるを得なくなっている。多くの店舗が被災した被災地では、震災後ますます顕著となってしまった。しかし、これは車を運転できない高齢者にとっては非常に不便な環境である。ほとんどの高齢者は歩いて行ける場所で簡単な買い物ができることを望んでいる。身近なところで買い物ができず引きこもりになっている高齢者も多い。
- アイデア……宅配サービス、移動店舗、御用聞き、野菜の物々交換、シルバーコンビニ、薄利多売ではないビジネスモデル等、買い物環境を補う方法はある。
- 必要な新しい発想……安いとか商品がたくさんあることが魅力のお店とは別の発想のお店が必要である。高齢者が自宅の一部を改造して経営し、小遣い稼ぎ程度の収入が得られる程度のお店とする。そのお店は高齢者をはじめとした地域の人々のたまり場ともなる。高齢者による高齢者のためのお店となり、近所の人はそのお店を支えるサポーターとなる。
- お店を越える役割……このようなお店は、地域のコミュニティを新たに醸成する場所となりう

る。また、高齢者にとっては生きがいの場となる。つまり経済原則によるお店ではなく、新たな地域の拠点となりうる施設である。

③ 支えあう仕組み

- 必要とされる支えあい…震災を経験して、支えあうことの大切さを改めて認識したという人が多い。しかし、現実には震災によるコミュニティの崩壊によって、支えあう仕組みもまた崩壊している。
- 高齢者の支え合い…被災者・高齢者が助け合う仕組みがほしい。人のためにできることをやるのが生きがいになる。
- 昔はあったしくみ…地域には、老人会、組でのお茶会、庚申講、結いなど支え合う仕組みがあった。それらは最近ではなくなってしまったが、新たな

④ 観光の活性化

- 観光資源…旭や飯岡にはたくさんの観光資源がある。これらを活用して産業を活性化し、仕事を生み出し、地域が元気になることを求めている人が多い。
- 海産物…シラス、シラウオ、イワシ、カツオ、飯岡蛸、アンコウ、月夜カニ、磯ガキ、ナガラミ、シラスウナギ、舌平目、桜干し
- 果物・野菜…貴味メロン、イチゴ、パセリ、柿、灯台キャベツ、三川トマト
- レジャー…釣り、花火大会、イルカ・ホエールウォッチング、屏風ヶ浦ツアー、サーフィン、砂浜への駐車、キャンプ、サーフタウン構想、シェアハウス
- イベント…24時間歩行大会、カニ歩き大会、砂の芸術祭、旭キャンドルナイト、朝市、ツールド千葉、しおさいマラソン
- 施設…飯岡荘、大原幽学記念館、温泉、展望台
- 働く場…若い人が働ける場がほしい。お年寄りが働ける。
- 名所づくり…海、屏風ヶ浦、飯岡荘、飯岡展望台、保健センター

⑤ 地域の活性化

- 九十九里全体の活性化…他地域の若いグループと連携し、九十九里に人が集まるしくみづくり
- 参加型・育成型のイベント…次世代につなぐイベント、被災のマイナスイメージを逆手にとったイベント、防災まちづくり観光などを行う
- 市の開催…道路沿いを利用して市をつくり、地域の名物とする
- サーフィン文化…サーフィン世界大会の誘致、サーフィンプロジェクト

⑥ 飯岡荘の復興

- 親しまれた飯岡荘…非常に多くの市民が飯岡荘に親しんできたと話している。温泉や食事で利用し、宿泊や結婚式に利用することも多かった。地域のコミュニティ施設となっていた。
- 昔の飯岡荘の課題…経営感覚がない、値段が高い、食事がまずい、バスの便が悪いなど改善を望む声も出された。
- 望まれる復興…ほとんどの方が飯岡荘の復興を望んでいる。
- 飯岡荘の活用…昔どおりの復興以外に、次のような活用のアイデアも出された。道の駅、コミュニケーションの場、朝市など名物の場、屋上展望台、林間学校用施設、地場の食材レストラン、中高生の集まる場所
- 防災利用…屋上避難による防災利用